

現象の虚実

——フッサール「理性の現象学」への一視角——

佐藤駿（東北大学）

『イデーン』第一巻第四篇「理性と現実」も終わり近く、フッサールはこう述べている。『真の現実』の現象学にとっては、『無にも等しい仮象』の現象学というものもやはりまたまったく不可欠なのである。私の見るところ、「仮象の現象学」はその不可欠の部分であるばかりでなく、むしろその核心へ至る王道である。読み手の観点からすれば、それはそもそも「理性」や「現実」と呼ばれているものの意味を見定めるために追究しなければならない課題としてある。事実、フッサールが「理性の現象学」として描いている哲学は、彼独特の表現や術語も相俟って、そのままではその本領を隠したままにしてしまっている。

本提題ではまず、仮象もまた私たちに与えられる現象である、すなわち仮象もまた現象するのだという考えのもとに、仮象の現象学のアウトラインを描く。そうすれば自ずと、現象の〈虚〉と〈実〉が自ら互いに構成されあう場として、フッサールの言う「理性」の構造（あるいは「理性」という構造）が浮かび上がってくるだろう。彼の言う理性とは、真理へと開かれている主観性のあり方そのものにほかならないのである。このことを示すと同時に、仮象もまた現象するということの内実を一步踏み込んで明らかにすることで、理性という場に経験と信念の全体を（非表象主義的に）描き出す現象学のポテンシャルを示唆できればと考えている。

仮象と表現なきもの

——ベンヤミン「ゲーテの『親和力』」における美と真理の関係——

森田 團(西南学院大学)

「ゲーテの『親和力』 “Goethes Wahlverwandtschaften“ (1921/22) においてベンヤミンは、とりわけ主人公の少女オットーリエの立ち現われの相、要するにオットーリエが読者に経験される相を特徴づけるために美しい仮象の概念を用いている。ベンヤミンの思想の展開から言えば、この概念はのちのアウラの概念に引き継がれるものの、美学の伝統から言えば、美しい仮象の概念はヘーゲルの『美学講義』における仮象概念に直接的に由来する。ヘーゲルによれば芸術作品の真理は仮象のうちに現象しなければならないが、ベンヤミンもまた美と真理の関係を仮象概念において考究しているからである。ただ親和力論では仮象における美の現れと真理との関係をいわば構造化する契機として「表現なきもの *das Ausdruckslose*」という謎めいた概念が提出されている。ベンヤミンは現象から原理的に退隠するものが美しい仮象の現出に不可欠であることを強調しているのである。本発表ではベンヤミンの仮象概念に美と真理がどのように関係するのかを、表現なきものの概念に注目しつつ明らかにすることを試みる。その際、ベンヤミンが現象学的美学で知られるモーリッツ・ガイガーのもとで学び、現象学に継続的な関心をもっていたことを鑑みて、仮象概念と現象学との関連(とりわけフッサールの『ファンタジー・像意識・想起』にまとめられている講義群)に目配せしながら、議論を構成することを目指したい。

像の否定性と超越論性
——ニーチェにおける仮象の現象学——

村井則夫（明星大学）

ニーチェのテキストでは、像をめぐる二つのベクトルがせめぎ合っている。初期のニーチェにおいては、「美的仮象」の着想によって、像の理解を形而上学的な実体論的思考から解放し、像の創造性を刷新する方向が見られる。臆見と学知^{ドクサ エピステーメー}、虚偽と真理といった二項対立を超越論的に捉え返し、実在と仮象の対立に解消しえない「現象」概念を構築する点で、この方向は 20 世紀以降の現象学とも共通する。『悲劇の誕生』では、仮象の内に働く否定的動向と超越論的契機とが相補的に捉えられ、像の概念そのものに、生成と運動、原像との差異が洞察される。ディオニュソスとは、そのような像の像化と、そこに発動する否定性を内的に形象化する神話的隠喩であった。美的仮象とは、像の超越論的・否定的遂行を自身の内で像化する「仮象の仮象」と理解される。

その一方で後期のニーチェは、『偶像の黄昏』に顕著なように、系譜学的思考によって「偶像」としての像の解体を目指し、やがて脱構築思想に継承される像破壊^{イグノクラスム}を徹底して推し進める。系譜学においては、道徳や宗教が、自己否定の契機を喪失した代理表象（偶像）として摘発され、イデア的・ノエマ的像理解の自己完結性が揺さぶられる。仮象は単に本体を欠いた代理表象^{シミュラクル}であるだけでなく、その像化自身に必然的にともなう自己硬直を「超越論的仮象」として打破し、差異化の運動へと自らを転換しうるものでなければならない。「永劫回帰」に代表されるニーチェの後期思想には、そうした像の否定性と超越論性の思考を突き詰めていった軌跡が見られる。そこで本論ではそのような像理解を現象学のひとつの可能性として検討してみたい。